

第14回 外妊、切迫流早産、そして夜泣きな日々



今回は、ちょっとマイッタ体験3連発です。人生には谷もあるんです。

1番目。

大学院生をしながら、大学病院で先輩医師の指導の下で主治医をしていた時のことです。

いつものように、病院と通りを挟んだ研究室の間を小走りに行き来していた時、ズドンと骨盤腔を底の方から叩き上げるような衝撃が走りました。歩けそうなので、時間をかけて研究室に戻ったのですが、どうも力が入らずやばいかもかもしれないと思い、一緒に研究をしていたテクニシャンに「ちょっと、あかんかも？」と弱音を吐いたのです。それを聞いて、彼女は即座に医者呼びに行き、私は車椅子かストレッチャーで病院に運び戻されました。



いろいろな科の医者に囲まれ、まな板の上の鯉になりました。鯉よろしく口をパクパクしながら、「外妊で血管破裂カモ？」とつぶやいたのです。それで、すぐに産婦人科の処置室に移動して、骨盤腔内に注射針を刺され、「ほれ、出血や！」と診断されて、緊急手術と相成りました。

「へへっ！自己診断が当たったネ！」と、ほくそ笑んでいたのは入局1年目の私だけだったかも。と、余裕はここまで。手術の準備を待つ間に、徐々に出血性ショックの症状が出てきました。冷や汗と強い吐き気と朦朧とした状態で手術台にたどり着いたのでした。入局同期の友達が手術に立会ってくれて、麻酔から目覚めた私に手術の詳細を速報してくれました。

手術も無事終わり産科病棟に入院していた時のことです。

日当直の若い産科の先生から相談を受けました。

「妊娠後期の患者が尿路感染症で緊急入院して、ショックになりかけてるかもしれへんねんけど、どないしたらええ？」、と。

丁重にお断りしました。

「私は患者やで、しかも、内科医や言うても新米のペーパーやで、わかるわけないやろっ！」と、心の中で啖呵を切っていました。

幸い、知らせを受けたベテラン産科医が即座に駆けつけて適正に対応し、事なきを得ました。緊張がビリビリ走る、退屈とは無縁の入院生活でした。

2番目。

それから1年以上過ぎた頃、3人目を懐妊。大学院の2年生も終わりの頃でした。

ところが、切迫流産と診断され、自宅蟄居（自宅安静）となりました。

突然の戦線離脱で、と言っても私の戦力はたかが知れていましたが、

大迷惑を被ったのが入局同期の医師です。私が受け持っていた入院患者数名を

代わりに担当してくれました。ありがとうございました。

その後も、切迫流産・切迫早産で入退院を繰り返し、同期の医師に助けられてばかりでした。

ほんま、同期の前では頭を挙げることはできません。

その頃は、今のような出生前診断などは、もちろん、ありませんでした。

私が入院中、母と夫は、胎児は大丈夫か、今回は諦めたほうが良いのでは、とコソコソと悪だくみを図っていたようです。

最終的に、「生むで！」と私が一喝して、生みました。それが長女です。



3番目。

この長女が筋金入りの夜泣き虫だったのです。

長男と次男の経験で、生後3カ月も経つと、夜間の授乳が不要になり、夜は眠ってくれるものと、高をくくっていました。

これが大間違い。長女は1歳近くまで、毎晩、しかも複数回夜泣きを続けたのでした。

私も夫も、昼間は、それぞれ、医師・大学院生と教育・研究でクタクタ。

おまけに、夜も十分に眠れないという日々が続きました。

詳細は忘れましたが、多分、毎晩交代で、彼女を背負って町内をぐるぐると歩き廻り、なだめすかして寝かしつけたのだと思います。

それでも最後は、彼女の成長が夜泣きに終止符を打ちました。

彼女は長じて、アメリカで完全変態します。

辛いことがあっても、きっといつかは、それが昔語りになる日が来ると思うよ。



久々に、わが家のルールブック：

七五三は、生まれた子供が感染症などで簡単に死亡する時代に作られた、

子の成長を祝う行事だと思います。

子供が受難の時代では、その成長を3歳、5歳、7歳で祝うのには意味があったと思います。

しかし、子供の感染症死がほとんど見られなくなった今日では、

このお祝いに意味があるのかな？ということで、わが家では七五三を祝いませんでした。

子供が、「千歳飴」を目にして七五三に行きたいとせがむと、
「あの子供たちはね、あそこの神社の奥のその先の奥の奥の奥に連れて行かれるんだよ。
そこで、赤鬼、青鬼、黄色に紫にバリバリと骨ごと食われるんだよ。どうする？行く？」と。
こうして、七五三熱を跳ね返したのです。

この鬼気迫る説明を聞いてからは、2度と七五三に行きたいとは誰も言いませんでした、とさ。

